

計画の〈時間〉性

矢守 克也¹

¹ 京都大学准教授 防災研究所 (〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄)
E-mail: yamori@drs.dpri.kyoto-u.ac.jp

「計画」することは、未来の出来事を予見し、それに先立って対策を練り事前対応をなすことだから、通常、未来指向的な営みだと思われている。しかし、精神医学者木村敏の〈時間〉論を踏まえれば、ことはそう単純ではない。「計画」を支えているのは、統合失調症患者に典型的な〈アンテ・フェストウム〉(祭りの前；未来先取的)な〈時間〉意識ではなく、むしろ、鬱病患者に典型的な〈ポスト・フェストウム〉(祭りのあと；過去拘泥的)な〈時間〉意識、である。〈アンテ・フェストウム〉における未来が、とんでもないことが起こるかも…という祭りの前の高揚と不安の併存にも似た、「圧倒的に未知なるものとしての未来」であるのに対して、〈ポスト・フェストウム〉における未来がすべて、予定済の将来(現在のつつがない延長)という形をとろうとする点が重要である。だからこそ、〈ポスト・フェストウム〉的な意識では、事が起きてから悔やんでも「あとのまつり」だと考え、事前準備に執着する。よって、「そんな事態[大災害]にならないように用心してかかる意識も、一見将来に備えての先走った姿勢[〈アンテ・フェストウム〉]に見えるが、実は『あとのまつり』になることを予想しての保守的でポスト・フェストウムの意識」(木村, 1982, p.108)である。

日本を含む先進諸国の防災の中核、たとえば、地震を予知しようとする、防災計画を立案すること、計画に基づいて防災訓練を実施すること—こういった社会的活動はすべて、〈ポスト・フェストウム〉的な〈時間〉性の発露だと言ってよい。なぜなら、それらは、ちょうど鬱病患者と似て、未来を真正の未知としてではなく予定済の将来という形で確保しようとする働きだからである。それは、まだ来ぬ未来の災害について、それをもう体験したこと(過去)のように扱おうとしているのである。

〈ポスト・フェストウム〉は、現代の防災研究・実践(むしろ、現代社会一般)を支える主軸的態度であり、通常有効に作用する。しかし、何らかの事情により「つつがない延長」が保証されないかに事態があらわれたとき、状況は一変する(鬱病者が発病するのも、この時点である)。たとえば、迎え撃つべき災害の規模が、すでに完了した対策や今後可能と思われる災害準備に比べて著しく大きいことが判明した場合である。このとき、多くの人びとが既往の「計画」とその中での役割分担に基づいて「几帳面に」積み重ねてきた災害準備が総体として、「とりかえしがつかないほど遅れている」(鬱病患者に典型的な言葉の一つ)と感覚される可能性が生じる。

この視点に立てば、たとえば、防災意識の欠如とは、字義通り、防災に対して「関心(意識)がないこと」ではないことがわかる。それは、むしろ、〈ポスト・フェストウム〉にとらわれた人びとが陥る鬱病(将来の災害のためになすべき課題があまりに多いために、現状を「とりかえしがつかない」と思うこと)である。ここから、次のような実践的な洞察も得られる。ちょうど、鬱病患者に、「頑張れ、立ち向かえ」と鼓舞し、「遅れ」の回復を促すことが、通常マイナスの効果しか生まないのと同様、防災意識が欠如・低下していると思われる人びとに、「まだまだ準備が足りないですよ」と指摘することは無意味である(人びとは、それをいやというほど自覚しているからこそ鬱病になっているのだから)。では、どのようなアプローチがあるのか。「脅しの防災はやめよう」(小山ら)、「防災と言わない防災」(渥美ら)、「クロスロード」(矢守ら)など、その萌芽はすでに芽生え始めている。実は、これらはいずれも、その理論的核心に、防災計画が随伴しがちな過剰な〈ポスト・フェストウム〉性を、〈アンテ・フェストウム〉性によって中和することを伴った実践と位置づける。

キーワード：〈時間〉論、〈アンテ・フェストウム〉、〈ポスト・フェストウム〉